

編集後記

たとえば「地球温暖化を食い止めるにはどうすればいいか」とか、「食料自給率をどう高めて行くか」などといった問いは、社会的に喫緊で重要なものであることは間違いない。そしてこの問いに対して答えを出すべく種々の人々が知恵を絞り、またアクションを起こしているわけである。しかるに人文科学の場合、かならずしも、事前に研究する意味が明確であるような、そんな問いを立てた上で研究に取かかるという段取りにはなっていないと思われる。西田幾多郎は「いまだ研究もせない前にまずその研究の利益を知ろうとする好奇心ほど有害なるものはない」という。これは、直面する課題が所与としてある研究と、人文科学とは別物であるという弁明とも読める。人文科学の場合、自分がどのような問題に直面しているのかそれ自体が研究の過程で明らかになっていくことが多い。それは、生きる事と、生きる課題の発見とが同時進行であるという意味で、人生そのものと似ている。誰もが自身の人生を歩むことから逃れられない以上、人文科学的な問いの立て方の意義があらためて見直されてよいのではないだろうか。もっとも研究と人生とを切り分けないと、自己の研究を対象化できないリスクを負うことになるだろうとは思うが。

(揚妻)

二〇一七年十一月二十五日 印刷
二〇一七年十一月三十日 発行

藤女子大学 国文学雑誌 (第97号)

振替 〇二七〇〇一四一 一六八〇七番
定価 五〇〇円 送料八〇円

編集人 菅 本 康 之
発行人

札幌市北区北十六条西二丁目
藤女子大学日本語・日本文学科研究室内

藤女子大学日本語・日本文学会

印刷所 札幌市中央区北六条西十五丁目
㈱491アヴァン札幌